

Earliest recollection の 内容特徴についての日米比較心理学的一考察

山 添 正

I 理論的背景

1. アドラーのライフ・サイクル理論

Earliest recollection (以下 ER と略記) は、そのまま訳すと「人生の一番早期の回想記憶」と言うことになる。その意味は、「最も幼い時の記憶」と言うことです。簡単に「一番古い記憶」とか、さらに簡単に「最初の記憶」とか「初期の記憶」と呼ばれる。これと類似した言葉に、「幼児記憶 (infant memory)」「自伝的記憶 (autobiographical memory)」と「個人的記憶 (personal memory)」などがあり、「最初の記憶」と訳すところしたニュアンスも紛れ込んでくるので、本稿では、あえて訳さずに英語のまま用いる。

ところで、精神分析家のアドラーによると「ER は人間のライフ・スタイルをその根源において、またそのもっとも単純な表現において示してくれる」¹⁾と主張している。ライフ・スタイルはアドラーの心理臨床理論に取り入れられて広められた。またアドラーはこのライフ・スタイルの問題に関係する ER の研究の意味を次の二つに整理して述べている。

「人々は、ER について話してくれる。彼らはそれを単なる事実だと思っており、それらの中に隠されている意味に気付かない。それゆえ、たいていの人は、彼らの ER を通じて、ライフ・スタイルと言う『彼らの人生の目的・他者との関係・彼らの環境の見方』を完全に中立な、そして恥かしがらない仕方で告白することができる」

ER において興味深いもう一つの点は、それらがきわめて圧縮されていて単純なので、それらを使って集団調査をすることが許されるということである。我々は、学級全体に彼らの最初の思い出を書いてくれるように頼める」²⁾

つまり精神分析家であるアドラーは、ER は人生の意味を読み取る研究に都合の資料であると言っている。

こうした考えのもとで、筆者は学生に自由連想法で「最初の記憶」について憶えていることを調査したことがある。その結果によると「下のきょうだいの誕生」とか「祖母の死」のような「印象に残る体験」と「事故・ケガ」等に関するものが多かった³⁾。矢野によると、こうした「回想の内容は、特異な印象的出来事がもっとも多く、事故などの情動的な経験も多い。日常的な情景もかなりあるが、情景の中に自己像がふくまれていたりすることからも分るように、幼児期記憶は幼児期に見た情景そのものではなく、後で構成された記憶であることが多い」と言っている⁴⁾。

ER は、「後に自我によって構成された記憶の一種である」がゆえに、アドラーの主張である「earliest recollection とライフ・スタイルの関係」が問題にされてくるものと思われる。

また、一般に、この種の記憶は、若い人達のルームメイト同志とかパーティの席上で親密になる関係を育む会話の中で共有される。また、専門家としては精神分析家がその専門的活動の一環として、クライアントから個人情報として収集する。この ER の一般的な使われ方は、アドラーの言うライフ・スタイルとの関係性を証明するものと思われる。その個人を知る方法として、ER は大変意味のある重大な情報であると言うことが、広く一般の人にも理解されていることを示している。専門的に言うと、ER は、個人のパーソナリティーを検査する投影テストの一種として役立つと言うのがアドラーの主張である。

2. フロイトの幼児健忘抑圧論

フロイトは、人に 3 - 4 才以前の記憶が無く、7 才くらいまでその記憶が断片的で明確でないと言う現象 (child amnesia 小児健忘) は、不安を喚起する前エディプス経験の抑圧に依ると考えた。意識の中に存在はするけれども、圧縮と孤立化の防衛メカニズムによってコントロールされているので、感情を欠落している。フロイトは、これを screen memory (Deckerinnnering) ⁵⁾

と呼んだ。この現象は、個人に憶えるべき事を教えて、それより脅威となる材（エディプス経験）を抑圧することを援助するために存在すると考えていた。この考えは、アドラーと同じで人間の自我の発達と ER の関係を説くものであるが、この仮説の検証は大変困難である。

この仮説からすると、抑圧のためにノイローゼ患者は、ER は大変少ないと考えられる。しかし、大変古い資料ではあるが Crook & Harden (1931) は、フロイトの仮説とは矛盾する結果を出している。つまり、ノイローゼ傾向の強い人の方が ER の想起率が良かったのである⁶⁾。

3. 認知理論

ピアジェの理論からすると、幼児健忘は、前操作的思考の一般的限界であるといえる。早期児童期の記憶は、大人が想起するのは困難である。なぜなら、そもそも2歳－3歳児には、正確な記憶が存在するかもしれないが、それを組織化する認知的機能つまり知性が存在しないので、記憶の体制化ができないからである⁷⁾。

ナイサーは、ピアジェとフロイトの考えを両方取入れて考えた。子供時代から大人まで連続して保持されている自伝的記憶の始まりは（幼児健忘の終わり）、ピアジェの言う前操作的思考期から具体的操作期に移行する時期に対応している。このことは、幼児健忘が情緒的要因のみならず認知的要因が関係していることを示唆している。つまり具体的、形式的操作の段階で使用されるスキーマが、前操作期に符号化されて形成された記憶と不適合なため、前操作期に形成された記憶を想起できなくなってしまう。それが幼児健忘の原因であると考えられるわけである⁸⁾。

その他多くの理論が存在するが、こうした理論的関心の深さにも拘らず ER についての経験的データは驚くほど少ない⁹⁾。よって、本稿は ER 研究の経験的アプローチをめざすものである。

Ⅱ 調査の目的と方法

1. 調査 (1) の方法

Earliest recollection についての筆者の上述したこれまでの研究をもとに、本稿ではつぎに述べる研究を進める。研究は2つ存在する。最初に、ERの年齢を特定する調査を実施する。一般に earliest recollection の“earliest”とは「3歳から4歳の間」と言われている¹⁰⁾。

聞き方で年齢が変動する事が有り、ERの年齢は不安定である。それで今回の調査ではこの不安定要因を少なくするため、想起の指標は各年度の10大ニュース（朝日新聞）という客観的な指標を用意した。想起率は下がるけれども、より客観的に“earliest”の特定化には適切である。自分の貯蔵庫から自由に検索する方法だと、内容の検討には適しているけれども時期の特定には不適である。

昭和47年度（1972年）生まれの学生648人を対象に、昭和47年から昭和52年までの各年度の10大事件を列記し、その項目について直接記憶している項目を挙げそれについてどのような直接関係する記憶を持つか答えてもらうことにした。こうするのは調査の確実性を期するためであり、単に「憶えている」と言うだけの反応の場合はERのスコアからは排除した。

調査表(1)昭和47年（1972）～昭和52年（1977）十大事件リスト

昭和47年（1972）

1. 横井さん生還
2. 札幌5輪で快挙
3. 連合赤軍事件
4. 高松塚発掘
5. 川端康成自殺
6. ニクソン大統領訪中
7. テルアブィブ空港テロ
8. ミュンヘン5輪テロ

昭和50年（1975）

1. 青木湖にスキーバス転落
2. 広島セリーグで初優勝
3. 3億円時効
4. 新幹線博多まで開通
5. 英女王来日
6. サイゴン陥落
7. 宇宙の握手、アポロ、ソユーズ、ドッキング
8. 人類最古の化石発見

9. 長沙漠墓発掘
10. ベトナム戦争

9. 女性発のエベレスト登頂
10. 沖縄海洋博

昭和48年(1973)

1. 水俣病
2. 金大中事件
3. 西の島新島誕生
4. 大久保清に死刑判決
5. 江崎博士ノーベル物理学賞
6. 巨人9連覇
7. チリ、クーデター
8. 西アフリカ旱魃
9. ウォーターゲート事件
10. マラソンのアベベ死去

昭和51年(1976)

1. ロッキード事件田中首相逮捕
2. 5子誕生
3. 桜美林優勝, 60年ぶり東京に
4. 中国江青ほか4人組逮捕
5. 具志堅世界チャンピオンに
6. モントリオール・オリンピック コマネチ選手
7. カーター大統領勝つ
8. 毛沢東死亡
9. 酒田市で大火
10. 火星に軟着陸

昭和49年(1974)

1. 田中首相金脈問題化
2. 小野田さん発見
3. 長島引退
4. 三菱重工ビルで時限爆弾が爆発
5. 三木内閣
6. ニクソン大統領辞任
7. ブラント西ドイツ首相辞任
8. 朴大統領を撃
9. モハメド・アリ, フォアマンに勝ち, 奇跡のカムバック
10. アメリカ大統領フォード

昭和52年(1977)

1. 王本壘打で世界最高
2. 青酸コーラ殺人事件
3. 江川ドラフト拒否
4. 有珠山爆発
5. 「ルーツ」流行語に
6. 山梨県立美術館ミレー購入
7. 慶応大学入試問題漏洩事件
8. 東洋大姫路初優勝
9. チャップリン死亡
10. プレスリー死亡

2. 調査表(1)の結果

a. 各項目の想起数

昭和47年(1972)

- | | |
|------------------|---|
| 1. 横井さん生還 | 0 |
| 2. 札幌5輪で快挙 | 0 |
| 3. 連合赤軍事件 | 1 |
| 4. 高松塚発掘 | 0 |
| 5. 川端康成自殺 | 2 |

昭和50年(1975)

- | | |
|----------------------|----|
| 1. 青木湖にスキーバス転落 | 3 |
| 2. 広島セリーグで初優勝 | 12 |
| 3. 3億円時効 | 15 |
| 4. 新幹線博多まで開通 | 4 |
| 5. 英女王来日 | 3 |

6. ニクソン大統領訪中	1
7. テルアビブ空港テロ	0
8. ミュンヘン5輪テロ	0
9. 長沙漢墓発掘	0
10. ベトナム戦争	4

6. サイゴン陥落	3
7. 宇宙の握手, アポロ, ソユーズ, ドッキング	7
8. 人類最古の化石発見	1
9. 女性初のエベレスト登頂	7
10. 沖縄海洋博	11

昭和48年(1973)

1. 水俣病	3
2. 金大中事件	3
3. 西の島新島誕生	0
4. 大久保清に死刑判決	0
5. 江崎博士ノーベル物理学賞	0
6. 巨人9連覇	3
7. チリ, クーデター	0
8. 西アフリカ旱魃	0
9. ウォーターゲート事件	0
10. マラソンのアベベ死去	1

昭和51年(1976)

1. ロッキード事件田中首相逮捕	42
2. 5子誕生	71
3. 桜美林優勝, 60年ぶり東京に	9
4. 中国江青ほか4人組逮捕	4
5. 具志堅世界チャンピオンに	45
6. モントリオール・オリンピック コマネチ選手	22
7. カーター大統領勝つ	28
8. 毛沢東死亡	7
9. 酒田市で大火	2
10. 火星に軟着陸	5

昭和49年(1974)

1. 田中首相金脈問題化	3
2. 小野田さん発見	3
3. 長島引退	13
4. 三菱重工ビルで時限爆弾が爆発	1
5. 三木内閣	2
6. ニクソン大統領辞任	0
7. ブラント西ドイツ首相辞任	0
8. 朴大統領を撃	1
9. モハメド・アリ, フォアマンに勝ち 奇跡のカムバック	2
10. アメリカ大統領フォード	2

昭和52年(1977)

1. 王本壘打で世界最高	123
2. 青酸コーラ殺人事件	46
3. 江川ドラフト拒否	46
4. 有珠山爆発	12
5. 「ルーツ」流行語に	6
6. 山梨県立美術館ミレー購入	32
7. 慶応大学入試問題漏洩事件	12
8. 東洋大姫路初優勝	10
9. チャップリン死亡	9
10. プレスリー死亡	7

b. 10大ニュースに対する個人記憶の例

「52年（1977）1. 王本壘打で世界最高」の反応を以下に別記する。

- 父親が、今日は絶対に世界新が出ると言った発言が当たった。
- 祖父が万歳をした。
- 記念の財布をもらった。
- 小学館の「小学何年生」特集か付録の小冊子をよんだおぼえがあって、それを記念した本壘打数とサインのプリントされたバスタオルを使っていた。
- 小学校中学年くらいで、よく野球をしていた。
- 自分がテレビの前で打つまねをしていた。
- ポスターを買った。
- 記念のシャンパンを持っていた。
- この時はテレビを家族で見っていたけど、いきなり停電になって、トランジスタラジオで聞いていた。
- 読売新聞から貰った下敷を小学6年まで使用した。
- 読売新聞からプレートを買った。
- その時母が湯飲みのお茶をこぼした。
- 打たれた投手が自分の父親に似ていた。
- 一緒に万歳をした。
- バックスクリーンに写ったホームランのシーンと、紙テープと花束をもらった王選手を憶えている。
- 手を上げていたのを見た。
- 下敷をもらった。
- クイズダービーでこの記録のホームランの時、王はホームベースを右足、左足のどちらで踏んだかという問題が出たから。（答えは両足）
- その時テレビを見ていた。
- 自分の誕生日だったので憶えている。
- 午後7時10分6秒
- 756号本壘打おめでとうというのが書いてある、舟を買ってもらった。
- 親とテレビを見ていた。
- 記念切手をもらった。

調査（1）の結果の「a 各項目の想起数」をもとに、年別に統計検定を試みたところ50年度と51年度で有意な差（ $f=24.1879$ $P<0.01$ ）があった。その他の経年的年度差は有意でなかった。よって、3歳と4歳の間にERの想起数の量的変化があると言える。

また質的な性質に関しては、結果bの「10大ニュースに対する個人記憶の例」より5歳になれば、内容、表現ともに明瞭なかたちをとることが理解できる。こうした記憶は大人の記憶と違わなくなる。よって、ERは5歳で完成終了すると言える。

3. 調査 (2) の方法

ERの量的側面とも言える年齢の特定が終わったところで、次にERの内容の分析に移る。ERの内容特徴を理解するため、Kihlstrom, J & Harackiewicz, J (1982)の研究を参考にして以下の諸特性について調査(1)と同じ648人の大学生を対象に質問紙調査を実施した。

Earliest recollection の質問紙

個人史の中で、ご自分の一番最初の記憶として憶えておられる事を思い出して下さい。そして以下の質問にお答え下さい。

1. それはどんなことでしょうか。
(複数ある場合は複数お書き下さい)
2. それはあなたがおいくつの時ですか。
① 2歳またはそれ以前 ② 3歳
③ 4歳またはそれ以後
3. その記憶の明瞭さについてお聞きます。
① ぼんやり ② はっきり ③ いきいき
4. イメージの性質について。
① 視覚的 ② 聴覚的 ③ 臭覚的 ④ 触覚的
⑤ 味覚的 ⑥ 筋肉運動的
5. 視覚的である時の色はどうですか。
① カラー ② 白黒
6. それは自分が見ているものですか。
① 自分が見ている ② 他人が見ている
③ 誰が見ていると言えない
7. 思い出す頻度について。
① ちょうど今思い出した
② 以前からときどき思い出す

- ③ しばしば思い出す
8. その内容について。
- ① 外傷的（ショック体験）
- ② 自分史に於ける重大なライフイベント
（きょうだいの誕生他）
- ③ 自分にとって重大なことではない
9. 感情的評価について。
- ① 快 ② 不快 ③ どちらでもない

4. 調査(2)の結果

調査(2)の結果の百分率は、表1「ERの内容各項目のパーセント」に示されている。

表1 「ERの内容各項目のパーセント」

	①	②	③	④	⑤	⑥
内 容						
年 齢	19	40	41			
明 瞭 さ	43	54	3			
知 覚 様 式	74	8	3	11	2	3
色 彩	72	28				
自 己 像	87	13				
頻 度	30	51	20			
外 傷 性	47	14	39			
感情的評価	20	32	48			

（数字はパーセント）

Ⅲ 考 察

ハーバード大学の学生164名を対象にした Kihlstrom, J. & Harackiewicz, J. (1982) の研究と今回の研究と比較する。比較の方法は、まず日米の大学生の調査結果の共通点と相違点とに分けて考える。

1. “earliest” の問題

調査(1)では、「3歳と4歳の間」という結果である。調査(2)では「3歳が40パーセント、4歳が41パーセント」で、調査(1)の結果を裏づけている。Kihlstrom, J. & Harackiewicz, J. (1982) のデータも「3歳と4歳の間」であり、この問題に関しては一部3歳よりも“earlier”の人が存在するが平均すると、全てのデータが「3歳と4歳の間」ということで一貫している。

2. 日米の共通点

① 知覚様式としては、ERでは「視覚的」イメージが優位であることが、日米の調査で確認された。したがって、上述したERの年齢の問題は、言い換えると情報が視覚的に符号化できる能力の完成を示しているのかもしれない¹¹⁾。「視覚」に関しては差はないが、知覚様式で日米で大きな差があるのは「聴覚」である。日本8パーセントに対して米国は32.9パーセントである。

② 色彩は「カラー」が日米とも70パーセントを越えている。

特に顕著な共通点は、年齢を除くと以上の2つだけである。一方相違点は、以下に見るように多くある。従って、ERの質的内容は日米でかなり異なっていると予想できる。

3. 日米の相違点

① 「明瞭さ」の日米比較表

	日 本	米 国
ぼんやり	43	24.7
はっきり	54	44.3
いきいき	3	31.0

① の「明瞭さ」については、全体としては「はっきり」が、日米とも多いが、その他の項目に関しては対照的である。つまり日本の学生は「ぼんやり」が米国の学生に比較して多く、逆に米国の学生は「いきいき」したイメージを持っ

ていることが特徴的である。日本の学生の場合「いきいき」は極端に少ない。

② 「想起頻度」の日米比較表

	日 本	米 国
今	30	6.3
時 々	51	69.6
頻 繁	20	24.1

② の「想起頻度」については、全体としては「時々」が一番多いが、「頻繁」に日米の差は少なく、「今思い出した」の項目は日本が圧倒的に多い。米国は極わずかである。従って、自我と ER との関係からすると米国の学生は、ER を自分の意識のなかに取入れているのに対して、日本の学生は自分の意識の外にしていることが理解できる。これは、後で述べる「外傷性」とか「快－不快」という ER の内容の感情的評価とも関係していると思われる。

③ 「外傷性」の日米比較表

	日 本	米 国
外 傷 的	47	26.7
重大な出来事	14	17
重大でない	39	56.3

③ の「外傷性」については、興味深い結果が出ている。「重大な出来事」とは、自分の誕生日、きょうだいの誕生、新しい家へ引っ越し、幼稚園の最初の日など、いろいろな種類の“出来事の最初”と言える出来事である。この項目に対しては、日米に差はない。ところが、日本の学生は「外傷的」で、米国の学生は「重大でない」項目の割合が高い。自我との関係で言うと、日本の学生の ER は自我にとって「疎」な内容であり、米国の学生の ER は自我にとって「親」な内容である。ここに日米の大学生のパーソナリティの相異から来る。根本的な違いが存在する。

④ 「快－不快」の日米比較表

	日 本	米 国
快	20	43
不 快	32	27.3
どちらでもない	48	29.7

④ の「快－不快」については、③ の「外傷性」と類似した傾向を示している。「不快」の項目が、日本の方が少し多いがたいした差はない。米国の学生で最も多いのが「快」であり、日本の学生が最も多いのが「どちらでもない」である。

以上これまでの日米の ER を特徴づける相違点を比較してまとめてみると、以下のようなになる。

⑤ ER の内容特徴についての日米比較表

	日 本	米 国
知 覚 様 式	視 覚	聴 覚
明 瞭 性	ぼんやり	いきいき
想 起 頻 度	今	頻 繁
外 傷 性	外 傷 的	重大でない
快 － 不 快	不 快	快
自我との関係	疎	親

日米の大学生の Earliest recollection の違いを以上のように整理することが出来る。この日米の相違は、ストレスと不快に対する日米の大学生の感受性の違いが反映しているものと思われる。このように日米に、ER の内容についての以上の様な相違があると言うことは、さらに一般化して考えると日本人と米国人のパーソナリティーの発達の違いが存在することを示唆するものである。

⑤の表をまとめて理論的に解釈するにはつぎのような推論が成り立つ。

日米に共通な「知覚様式」の解釈には「認知論」が、「自我との関係が疎」の日本人の解釈には「フロイトの抑圧論」が、「自我との関係が親」の米国人にはアドラーの理論がよくあてはまるかもしれない。つまり「知覚様式」は、ER形成の道具にあたるもので、比較的共通性が高い。しかし自我との関係を規定するものは、「外傷性」「快-不快」などの「情緒」である。この違いは、文化そのものと言っても言い訳で、「素直さ」を教育・しつけで要求される日本と「自己主張」を強調される米国の教育・しつけと大変異なるところから来ている¹²⁾。

Earliest recollection は人間のパーソナリティー研究の一方法になりうる事が理解されたが、パーソナリティーと記憶の関係の主たる問題は、個人の自伝的記憶にどのように接近するか依存しており、それを検索し再構成する仕方を工夫することでより妥当な研究が可能になると思われる。

以上の研究の結論として言えることは、子供時代の回想、つまり自伝的記憶の保持と再構成と連合した情緒的ダイナミックスは、パーソナリティー形成にかかわる重要な一般的心理的発達の過程と関係している。

文 献

- 1) Alfred Adler. What Life Should Mean To You. 1932
人生の意味の心理学 (高尾利数訳) 春秋社 1984 p85
- 2) アドラー 前掲書 P86-87
- 3) 山添 正 物語法による現代日本の子ども学入門 1933 ブレーン出版. P1-15
- 4) 矢野喜夫・落合正行 発達心理学への招待 サイエンス社 1991 P140
- 5) Freud, S. Ueber Deckerinnerungen. Gesammelte Werke 1 Fisher P529-554
- 6) Crook, M & Harden, L. A quantitative investigation of early memories. Journal of Social Psychology 1931,2,P253-255.
- 7) Piaget, J & Inhelder, B. Memory and intelligence. New York 1973.
- 8) Neisser, U. Cultural and cognitive discontinuity. In Gladwin, T. & Sturtevant, W (Eds), Anthropology and human behavior. Washington, D. C.

1962

- 9) Kihlstrom, J. and Harackiewicz, J. The earliest recollection: A new survey. *Journal of Personality* 50:2 June 1982 P135-136.
- 10) Dudycha, G. J., & Dudycha, M. M. Childhood memories: A review of the literature. *Psychological Bulletin*, 1941, 38, 668-682.
- 11) Tulving, E., & Thomson, D. Encoding specificity and retrieval processes in episodic memory. *Psychological Review*, 1973, 80, 352-373.
- 12) 山添正編 心理学から見た現代日本人のライフサイクル 1991
ブレーン出版 P43-44